

が届きました。毎週金曜日に携帯メールマガジンの配信を始め、2008年2月、小児救急冊子「病院に行く、その前に…」を発行。フローチャートは受診抑制のためではなく、重篤な症状を見逃さないように…との思いを込めて作成。監修は県立柏原病院小児科。丹波市の乳幼児のいる家庭に全戸配布された。新聞、テレビ、雑誌などで頻繁に取り上げられ、全国からの注文が絶たない状況です。

適正受診が進み、柏原病院小児科の時間外受診者数が半減。それに伴い入院率が上昇していった。入院率の上昇は二次救急病院としての機能が果たしている証明です。現在は、地域医療を守ろうという地域をあげての取り組みが増え、子育て世代の守る会だけでなく、さまざまな立場や年代の皆さんがグループを結成し、地域医療を守る活動を展開しています。

活動を進める中で気付いたことは、医師と住民は、医療を施すものと受けるものという相対するものではなく、ともに力を合わせて地域の医療を作り上げていくパートナーのようなもの。今いる医師が働きやすい環境、医療に理解ある地域づく

りを進めることが大切である。守る会は住民に地域医療の現状を伝え、住民として何が出来るか？をともに考え行動するよう呼びかけている。多くの人に現状を伝えることで、小さな力がやがて大きな力になり、地域が変わっていくのだということを実感している。しかしながら、行政・医療者・住民が「地域医療を守る」というひとつの目標に向けて、協力しなければ状況の打開はできない。それぞれの立場からの更なる行動を願っています。今、日本のあちこちで医師に対してありがとうメッセージを送るといふ「ありがとう運動」が広がっています。医師に感謝の気持ちを伝えるだけで医師は元気が出ます。最後にこの十勝にも「ありがとう」が広がっていくことを願いつつ講演をおわります。



地域をあげての取り組み
街路灯にフラッグを取り付ける商店街

シンポジスト発言要旨

いざよい会ってなあに？

本別町国民健康保険病院 ボランティアワークショップ 山岸 広美氏

私たちは、平成13年に病院の基本理念を「思いやりをもち、ひとにやさしくていねいな医療の実践により地域に愛される病院になろう」と制定し地域に開かれた信頼される病院づくりに取り組んでいます。町民が参加する活動には、病院モニター会議、病院ボランティアの導入、お出かけ医療講座、そして町民医療講座「いざよい会」があります。さらに患者満足度調査や町民アンケート調査があります。「いざよい会」とは病院の理念に沿って愛される病院づくりのひとつで誰でも参加できるよろず勉強会です。いざよい会の目的は3つあります。

*「開かれた病院」「信頼される病院」づくりをめざす

*生涯学習の場の提供

*病院を本当の意味で町民に支えてもらい、病院 職員はその期待に応えたい

いざよい会のあゆみは、平成13年に諏訪中央病院を視察し、ボランティアの活動が病院に新しい風を送り込むのをみて、大変刺激をうけ準備メンバーはすぐに病院ボランティアワークショップを始めました。次に病院ボランティア養成講座を月2回開催しました。平成14年4月には親しみやすい名称を考えようと、いざ、よいボランティアをしましょうという意気込みをこめて「いざよい会」とし病院から地域へ出かけて行き顔の見える医療、予防医療の充実と啓蒙活動をめざしました。「いざよい会」となり月1回の活動を続けています。現在141回が終了し、参加者数は7,000人を超えています。

事務職、技師、助手、看護師のメンバーで構成され、いざよい会が運営されています。講師の依頼、講師との調整、会場準備、広報活動、司会進行、ビデオ記録、反省会、ホームページ報告など多くの役割を分担しています。

▶講座の内容は多岐にとみ、すべてホームページで報告していますので、是非ご覧ください。

<http://www.honbetsu-kokuho-hp.jp/izayoi/izayoi.htm>

シンポジスト発言要旨

めむろ☆育児サークル『はぐ Hug』の活動報告

めむろ☆はぐ Hug の会代表 前田 香織氏

育児サークルめむろ☆はぐ Hug の会は、助産師が中心となり母と子のふれあいを促し、母乳で子育てするための情報交換の場を作りたいと発足しました。公立芽室病院は平成18年にユニセフとWHOの「あかちゃんに優しい病院」に認定され、地域との連携を深めたいと、場所の提供をして活動を始めました。平成19年には活動を一新し、妊婦や子育てしている方も誰でも参加できるように運営を助産師からママ主体へと移行しました。会員制ではなく毎回自由参加で、現在は8名のスタッフで運営しています。毎月1回テーマにそってグループワークをしたり、講師を招いての勉強会を開催しています。グループワークでは、母乳・お産・離乳食・パパの育児参加・トイレトレーニングなどのテーマで自由に語り合います。はぐ Hug とは別にこれから母親になる方たちを対象にしたプレママ編の「ベビベビ」を始めました。子どもを授かったことを知ったときから、子育てが始まり、今までとは違った変化が体に起こります。先輩ママたちと話すことで妊娠中の不安やストレスなどを解消する場になっています。

はぐ Hug もベビベビも公立芽室病院の助産師が参加していますのでじかにプロの意見を聞けるというのもこのサークルの特徴です。また、町のボランティアが毎回子守りのお手伝いをしてくれますので安心して参加できます。

妊娠中、妊娠の可能性のある女性たちが、先輩お母さんや助産師さんたちと話をするなかで、仲間作りができ、支え合うなかから妊娠、出産、育児について知ることができれば、人生の大イベントについても楽しく過ごせるのではないのでしょうか。またそうしたお母さんたちから次にお母さんになろうとしていく人たちに伝えていけたらそれは素晴らしいことだと思いつつ活動しています。育児サークルは活動が煩わしいという理由で減少しているそうですが、これからもお母さんたちのためにより良い活動をめざしてがんばって続けていきたいと思つています。

シンポジスト発言要旨

崩壊する地域医療を守るためには

鹿追町国民健康保険病院 白川 拓氏

日本は世界一の高齢化社会であり、少子化が進行し人口が減少しています。経済成長は鈍化し景気の長期低迷が続いています。日本の医療の現状は世界一の赤字財政国家で、低い国民負担率(租税・社会保障負担)で社会保障給付費も低く低福祉となっています。医療崩壊・医師不足の原因は医療費抑制政策によるものです。

医療に市場原理は合わないのに競争させようとしています。

日本の医師数は大幅に不足しています。医療費を含めた社会保障費も抑制されている。しわ寄せは、国民や医療機関にきている。社会保障制度の機能強化が迫られている。医療費の抑制は患者の窓口自己負担の減少と誤解されているが、日本は患者窓口自己負担の割合が高い。高齢化を迎え、今後必要な病床数が増えてくるが、道は、道内にある94の自治体病院のうち38病院について、ベッド数が19床以下となる診療所への規模縮小の検討を求める考えを明らかにした。十勝郡部の17町村には8自治体病院があるが、そのうち7自治体病院に診療所への転換が求められている。すでに、十勝郡部は帯広市と比して、医師数、病床数において地域格差、医療格差を強いられている。

鹿追町は、人口6千人の町で、病院のほかに診療所2施設、老健施設(100床)、特老ホーム(50床)がある。病院はケアミックスで運営しているが、地域社会のニーズに応えるため、専門性よりも多機能性を重視した運営のため効率の悪さを指摘されている。しかし、保健・福祉部門と連携し住民に「安心」「満足」「幸福」を提供することを目指しています。